



TITLE:

支那事變に際し昨年の日食を思ふ

AUTHOR(S):

本田, 實

CITATION:

本田, 實. 支那事變に際し昨年の日食を思ふ. 天界 1937, 18(200): 54-56

ISSUE DATE:

1937-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167574>

RIGHT:

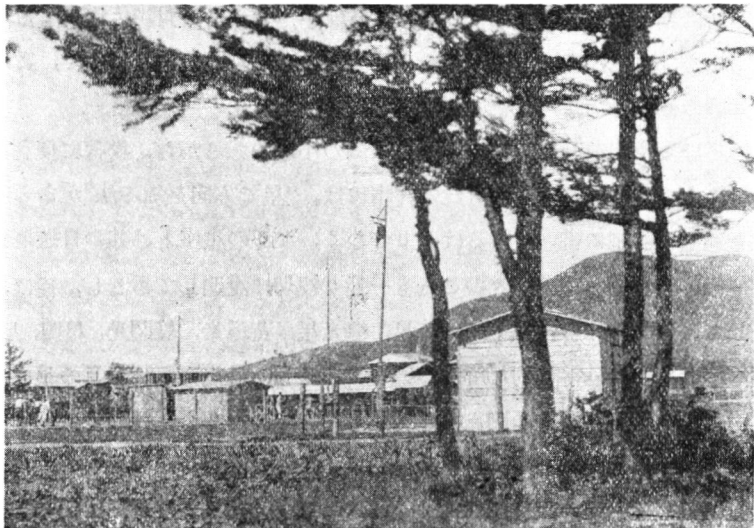
支那事變に際し昨年の日食を思ふ

瀬 戸 本 田 實

正義の國日本が、支那四億の民衆を暴戾なる軍閥國民政府の手より救はんため、コミンテルンの魔手より救ひ、眞の東洋平和の爲に、敢然と暴支膺懲のために、橋畔一發の銃聲は、全日本を奮ひ立たせたのであつた。

天皇の御稜威燦と輝き、陸に海に、我等が皇軍は輝かしい戦果を収めつゝある。この時に當り、お互に東洋平和の爲手を取り合はねばならない兩國民が、一方は排日教育を徹底させ、一方はその悪夢をさまさすべく矛を取るの時、私は、この日支の感情の極端に達するの時、あの昨年の日食時に於ける、北海道枝幸に於ての日支兩國の觀測隊の、あのうるはしい學術上の協力を、思ひ起さざるを得ないのである。

中華民國の觀測隊が枝幸に來たのは6月の11日であつた。この日オホーツク海に發生する、北見國特有の濃霧は、枝幸の村を立てこめて、何となくしつとりと、もの柔かな日であつた。京大組はこの日枝幸に來る支那の觀測隊を迎うべく、枝幸、小頓別間の小路を自動車をとばせた。その日朝早く村役場の人



左…京大觀測所、右…支那觀測所、右の國旗は青天白日旗

と荒木(健)先生は小頃別まで、お迎へに出てゆかれた。

自動車は非常に空氣の透明な、とど松や、から松の原始林の間をぬつて進んでゆく。牧場の牛が自動車のひびきに驚いて、黒い背に波打たせながら、ノリノリとよける。

枝幸、小頃別間、幌別川の清流が、北へ流れてゐるところで、支那の觀測隊をのせた自動車に出會つた。自動車に、日支兩國旗をつけて進む自動車は誠に微笑しい親善の風色であつた。尙同行御案内役の、山本教授夫人や、東京自由學園觀測隊の諸嬢も乗つてゐられた。

余青松南京天文臺長が、自動車から半身をのり出して、京大の竹田助教授と挨拶してゐる聲は靜かであつた。

この日、枝幸村民及び、小學校、女學校生徒一同は、手に手に、日支兩國の國旗をもつて村はづれまで出迎へた。異郷に故國の旗をみる。余青松隊長始め隊員は殊の外感深げであつた。

それより、村役場に至り、村民の觀迎會が開かれた。そして宿舎に當てがわれた北海漁業會社の蟹工場の寄宿舍の一室に收まつたのであつた。

日食の日も差しせまつてゐたので、支那の人々は、その日の夕方から、小學校裏庭の、京都大學の觀測所にならべて、器械の組立てを始めた。

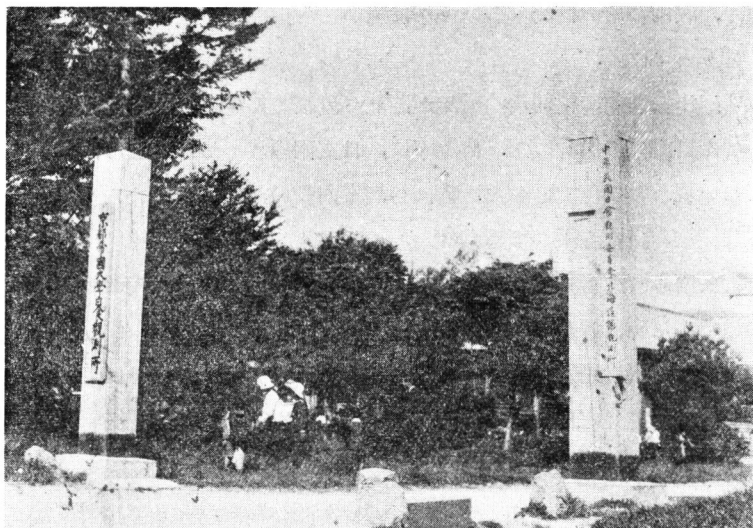
テントを張つた小屋の中で、おぼつかない日本語を話す隊員を相手に、ネジをしめたり、足を組立てたり、器械の据付を手傳つてやつた。

そしてその翌日から、ラヂオをもつて來てゐないので、クロノメーターをあづかり、我々のつくつてゐた暗室も仲よく一緒に使用することにした。殊にクロノメーターを私があづかるようになったのは、その責任の重大を感ずると共に、又うれしい限りであつた。一つのレシーバーを二つに分けて片耳づゝで、荒木先生と、あの美しい報時の音樂的のひびきを聞いたものである。

それより前、小學校の生徒は毎朝、日食の日がよい天氣になりますやうにと神社へ日參して呉れた。余青松臺長が、枝幸へ來て二三日經つた日、小學校に講演に行つて、そしてこの「天氣になるやうに」との日參に感激し、「この日の日食が幸にも成功したならば、その一人いやその全部は、熱誠こめて祈つて下さつた皆様(小學生)の賜に外ならない」と、感謝の辭を述べたそうである。

日食の當日がきた!! 幸にも村人の熱誠が容られたのか、空は美しく晴れ渡

つて観測は成功した!! 我々のよろこびも大きかったが、又遠くこゝまで遠征した余青松隊長はじめ支那の人々のよろこびも又大きかったであらう。其夜枝



枝 幸 小 学 校 々 門

幸村主催の観測慰勞會と送別會が開かれ、厚く厚意を謝して其の翌朝、支那観測隊は故國へ向け歸つて行つた。

私は今思ふ！ 今全日本は打つて一丸となり暴支膺懲のため、海に陸に堂々の陣を進め、兩國の感情の悪化之以上はないであらう。しかしながらあの日食當時支那の観測隊に示した、枝幸村當局及び、京都大學の示した友情を、單に枝幸村當局、京都大學の示した友情としてゞなくして、全日本の示した暖かい友情として、彼等は決して忘れるものではなからうと。

少くとも支那國民のうちに彼等だけは、日本の友情がどんなものであるかを知り、そして日本の眞意をよく知つてゐるであらう。

更に思ふ、無敵空軍の爆撃下にさらされる、南京郊外紫金山天文臺で、私の枝幸でしばらくでもあづかつてゐたあのクロノメータは、どんな音をして時を刻んでゐるであらうかと。

願くは、一日も早く兩國共に手を取りて、眞の東洋平和のために、歩調を合せて堂々進む日の近からんことを祈る。(12. 11. 5)